2020年09月29日 読売大阪 朝刊 広島 13版 31頁

復旧のあり方 住民と模索

西日本豪雨の被災地で土砂を取り除くメンバー（2018年7月、呉市天応地区で）＝コミサポひろしま提供

呉の団体「コミサポひろしま」

災害被災地で支援活動に取り組む呉市のボランティア団体「コミサポひろしま」（小玉幸浩代表）が、読売光と愛の事業団の「災害ボランティア支援制度」の助成先として登録された。同団体は「身が引き締まる思い。助成により、次の災害への備えがしやすくなる」と今後の活動に意気込んでいる。

（上羽宏幸）

光と愛の事業団が助成

同団体は2014年8月に発生した広島土砂災害で、大きな被害を受けた広島市安佐南区の八木地区に集まったボランティアが同年10月に結成した。当時、全国から支援を受けて活動し、復旧、復興のノウハウも蓄積された。「今度は広島から他の地域を手助けしよう」との思いからだった。

16年4月の熊本地震や18年4月の島根県西部地震、昨秋の台風15、19号による被害などで各地を支援。今年7月の豪雨災害で球磨川が氾濫した熊本県八代市坂本町では、今もメンバーが活動を続けている。

現在のメンバーは県内外14人で、被災地では家屋の復旧作業を主に担当する。これまでの活動の中で取りそろえてきた自前の重機や、チェーンソーなどを駆使し、家屋から土砂やがれきなどを取り除いて消毒を行う。破損箇所の修繕といった大工仕事もこなす。

被災地で数か月にわたって活動し、住民に話を聞きながら復旧のあり方を模索するのがモットーだ。当初は再建を諦め、転居を考えていた被災者が、同団体の家屋復旧活動を通じて「リフォームして住み続ける」と決意するケースもあったという。現地での活動から引き揚げた後を見据え、住民たち自身が復興を担うためのグループづくりも手助けする。

活動資金は主に寄付が頼りだが、同制度の登録団体となったことにより、メンバーが支援のために被災地入りした段階で必要な活動費用が助成される。コミサポひろしまの増田勇希事務局長は「広島では近年、土砂災害と西日本豪雨という2度の大災害で全国から支援を受けている。助成制度により、同じように被災した地域にどんどん恩返しができる」と喜んでいる。